

ヒンドゥー教正統派におけるサティの解釈

—プラーナ聖典を中心に—

相川愛美

1. はじめに

インドにおいてサティ (*sati*) とは、夫が死んだ際に妻が夫の遺体と生きたまま茶毘に付されること (寡婦殉死) を意味する。サティになった女性とその家系は、彼女のその自己犠牲によって、来世において偉大な果報があると考えられ、サティ (寡婦殉死) する女性は“貞節な妻”として人々から称賛された。

サティに対する観念は、様々なヒンドゥー教文献において示されてきた。その中でも、インド最古の文献であるヴェーダ聖典は、古代の宗教や神話はもちろん、一般的な社会事情を知る上で重要な文献である。これは祭式主義を根幹とするバラモン教の聖典で、古代から現代に至るまで、ヒンドゥー教徒はヴェーダ聖典が宗教の源泉であると考えて非常に重要視してきた。一例として、ヒンドゥー教正統派であるスマールタ派 (*Smārta*) とは、不二元論を唱えたインド中世の宗教家であり哲学者もあるシャンカラ (*Śaṅkara*) を奉ずる人々のことを示し、彼らは主にマヌ法典 (*Manu-smṛti*) やヤージュニャヴァルキヤ法典 (*Yājñavalkya-smṛti*) のようなダルマシャストラに記述される儀礼を行うなど、伝統的な習慣を維持し続けることに重きを置くことで、ヒンドゥー正統派としての権威と名声、そして、カースト社会の最上位者ブラーフマンとしての地位を保ってきた¹。特に、バクティ信仰が盛んに行われていた時、彼らは、ブラーフマンの習慣ではないそれらの要素を彼ら自身の伝統の儀式として取り入れた。その結果、地元や民間における伝承は、彼らブラーフマンたちによって、正統的オーラを発しサンスクリット化された。また、彼らはヒンドゥー教の伝統を伝える仲介者と化し、正統派ブラーフマンからヴェーダを学習する資格がない婦女やシュードラの教育を目的にプラーナ聖典 (*Purāna*) 類を作りあげ、彼らブラーフマンの宗教的イデオロギーを世間に浸透させた。

本稿では、ヒンドゥー教諸文献におけるサティの解釈の考察の一端として、ヒンドゥー教正統派によって編纂が繰り返し行われてきたプラーナ聖典におけるサティの解釈の考察を試みる。これまでのヒンドゥー教諸文献におけるサティの解釈は、理想の妻に求める戒律的な要素が示されるのに対し、プラーナ聖典では、物語形式で描写されてい

1 [Brill 2011:546-555]

る傾向があり、それはプラーナ聖典の読み手を考慮されており、プラーナの特徴がみられると考える。

プラーナ聖典には、伝統的にマハープラーナ (*Mahāpurāna*) と呼ばれる 18 の代表的な聖典と、36 の副次的なウパプラーナ (*Uapurāna*) と呼ばれる聖典が存在する。これらの内容は、宗教伝説・祭祀の実践・霊場巡礼に大部分を占めており、いくつかのものは特定の宗派の欲求に応じた集成である²。また、ウパプラーナは、互いの関連のない賛歌・霊場の賛美・様々な靈感に関する概論などからなる³。筆者は、この 18 のマハープラーナ聖典に描写されているサティーの記述に注目し、それぞれの聖典において、サティーの解釈がどのように行われているかの考察を試みる。本稿では、その過程における一部のプラーナ文献を扱う⁴。

2. プラーナ聖典

プラーナという言葉は、サンスクリット語で「古い」という意味で、過去の出来事、または、過去の出来事の物語のことを示し、インドにおける百科全書的な内容が記載されている聖典である。これらの起源は古く、宗教的な教義とは別に、インド各地において伝わってきた神話や哲学、風俗、地理、歴史、儀礼、音楽など様々な内容が含まれている⁵。また、プラーナ聖典には 5 つの定義 (パンチャラクシャナ: *pañcalakṣana*) と言われるプラーナ聖典が含むべき題材がある。この要素はプラーナ聖典の重要な特徴として考えられている⁶。

プラーナ聖典は、ヒンドゥー教の聖典とされているが、ジャイナ教の聖典においてもプラーナが存在し、これらはサンスクリット語のみで書かれているというわけではなく、サンスクリット語からインド各地の方言の言葉に翻訳されたもの、または、もともと方言で編纂されたものがある⁷。

各プラーナ聖典の起源をたどることは非常に難しい。その理由として、プラーナの口頭における起源と現存している聖典の起源が同じであるとは言えず、そもそも、口頭伝承と書物としての聖典では、それぞれ目的が異なるからである⁸。Doniger によると、年代を正確に特定するのは難しいが、プラーナ聖典のいくらかは明らかに古く、それは叙事詩マ

2 [ルヌー 1996:26]

3 [ルヌー 1996:25]

4 本稿は 2009 年に提出した修士論文『サティー観の歴史の変遷に関する研究』の第 2 章ヒンドゥー教文献に見られるサティーをもとに補足、再考察したものである。

5 [ルヌー 1996:25-26]

6 澤田によるとパンチャラクシャナは以下に示される。

1) *sarga*: 第一の創造、宇宙の創造 2) *visarga*: 第 2 の創造、もしくは年代記を含む世界の破壊と創造 3) *vamśa*: 神々や聖仙の系譜 4) *manuvamśa*: マヌヴァンタラ (*manvantara*) と呼ばれる人間の祖マヌの時代の記録 5) *vamśānucarita*: スーリヤヴァンシャとチャンドラヴァンシャに属する諸王朝の系譜 [澤田 2016:10]

7 [Matchett 2003:129]

8 [Matchett 2003:129]

ハーバーラタ (*Mahābhārata*) よりも後に編纂される。つまり、4世紀から6世紀ぐらいに編纂されはじめ、それらは12世紀以前に現在の状態に達したと考えられている⁹。

Matchettによると、プラーナは一般的に、叙事詩マハーバーラタと同様で、古代において、王侯の武勇や家系の系譜称賛の詩を詠むのを生業とした吟遊詩人、スータ (*sūta*¹⁰) によって暗唱されていたと考えられている¹¹。プラーナの内容は、このスータによって唱えられ、聴衆者に合わせて、様々な要素を受け入れ、挿入し、改ざんが繰り返され変化し続けている。そして、それが、何世紀にもわたって伝承されてきた。そもそも、物語を紹介することがスータにとって重要な役割であり、プラーナ聖典の編纂者ではない。

プラーナ聖典は基本的に対話形式となっており、難解な言葉や議論なども物語中の聞き手によって質問されるという形式をとっているため、理解しやすいと考えられている¹²。また、プラーナはパフォーマンスとしての性質や、対話形式を象徴とする聴衆の参加こそが重要と考えられているので、場合に応じて、新しく建設された寺院の賛美などを組み込んだりして、継続的に変化させていくなかで、彼らの核心であるメッセージを維持している。一方で、プラーナが可能な限り正確に記憶され、世代から次の世代へ完全に伝達されているかどうかについて示すものはなく、つまり、現在、プラーナ聖典は書物として存在しているが、これらの内容に関しても、そもそも、いつ口伝から文字媒体へと変化したのか、プラーナ聖典自体が問題視していないため、明確になされていないのが現状である¹³。

伝統的にマハープラーナと呼ばれる18の代表的な聖典については以下の通りである。尚、これは『ヴィシュヌプラーナ』3.6.20-4において明記されている。

『ヴィシュヌプラーナ』 (*Viṣṇu-purāṇa*) に明記されている18のマハープラーナ

1. ブラフマプラーナ (*Brahma-purāṇa*) 10,000 詩節
2. パドマプラーナ (*Padma-purāṇa*) 55,000 詩節
3. ヴィシュヌプラーナ (*Viṣṇu-purāṇa*) 23,000 詩節
4. ヴァーユプラーナ (*Vāyu-purāṇa*) 24,000 詩節¹⁴
5. バーガヴァタプラーナ (*Bhāgavata-purāṇa*) 18,000 詩節
6. ナーラダプラーナ (*Nārada-purāṇa*) 25,000 詩節
7. マールカンデーヤプラーナ (*Mārkaṇḍeya-purāṇa*) 9,000 詩節

9 [Doniger 1990:65]

10 [ヒンディー語 = 日本語辞典 2006:1372]

11 [Matchett 2003:129]

12 [澤田 2016:8]

13 [澤田 2016:9]

14 18のマハープラーナについて、Kaneによると、マツヤプラーナ、アグニプラーナ、ナーラダプラーナでは、4. ヴァーユプラーナ (*Vāyu-purāṇa*) であるが、他の文献などではシヴァプラーナ (*Siva-purāṇa*) であると言及する。[Kane1977:815] 他にも同様な例が [澤田 2016] においても指摘がなされており、18のマハープラーナは文献によって若干の差異がある。

8. アグニプラーナ (Agni-purāṇa) 16,000 詩節
9. バヴィシユヤプラーナ (Bhaviśya-purāṇa) 14,500 詩節
10. ブラフマヴァイヴァルタプラーナ (Brahmavaivarta-purāṇa) 18,000 詩節
11. リンガプラーナ (Liṅga-purāṇa) 11,000 詩節
12. ヴァラーハプラーナ (Varāha-purāṇa) 24,000 詩節
13. スカンダプラーナ (Skanda-purāṇa) 81,000 詩節
14. ヴァーマナプラーナ (Vāmana-purāṇa) 10,000 詩節
15. クールマプラーナ (Kūrma-purāṇa) 18,000 詩節
16. マツヤプラーナ (Matsya-purāṇa) 14,000 詩節
17. ガルダプラーナ (Garuḍa-purāṇa) 18,000 詩節
18. ブラフマーンダプラーナ (Brahmāṇḍa-purāṇa) 12,200 詩節

マハープラーナにおける詩節は、400,600 の詩節となり、壮大なボリュームの内容であることがわかる。また、これらの 18 のマハープラーナはいくらかカテゴリーに分けることができる。Kane では、4 つカテゴリーに分けられており、6. ナーラダプラーナ、8. アグニプラーナ、17. ガルダプラーナは、百科事典的、2. パドマプラーナ、9. バヴィシユヤプラーナ、13. スカンダプラーナは、主にティールタ (*tīrtha*¹⁵) を扱い、7. マールカンデーヤプラーナ、11. リンガプラーナ、14. ヴァーマナプラーナは主に宗派について、そして、18. ブラフマーンダプラーナ、ヴァーユプラーナは史実的な内容が示されている¹⁶。

本稿においては、この 18 のマハープラーナのうち、2. パドマプラーナ、3. ヴィシユヌプラーナ、5. バーガヴァタプラーナ、そして 17. ガルダプラーナにおけるサティーの記述について取り上げる¹⁷。

2. プラーナ文献におけるサティーの記述

2-1. 『パドマプラーナ』

この文献は、ベンガル版と西方版 2 つの改版があり、ベンガル版では 5 つの章 (カーンダ: *kāṇḍa*) で構成されている¹⁸。このベンガル版は発行されておらず、ānandāśrama 出版社と veṅkaṭaśvara 出版社によって、南インド版が発刊されている。この両方のエディション

15 ヒンドゥー教の聖地。川の浅瀬や水辺の階段を意味する。それは、人々が水辺で沐浴して身を浄めてから礼拝・念想などの行為を行うことから、聖地一般の意に拡大された。[南アジア 1992:435]

16 [Kane 1977:842]

17 本稿における文献の選定理由について、プラーナ聖典におけるサティーについて考察するにあたって、18 のマハープラーナ文献の入手状況やサティーの記述内容確認などができた文献から考察することにした。

18 1) ādī-kāṇḍa 2) bhūmi-kāṇḍa 3) brahma-kāṇḍa 4) pārāla-kāṇḍa 5) śāṣṭri-kāṇḍa

は6章¹⁹で構成されている²⁰。年代は、研究者によって意見が異なり、また一部では9世紀から15世紀ではないかと推測されているが、Kaneによると10世紀以前であった可能性があると説かれる²¹。

『パドマプラーナ』に次のようなサティーに関する記述がある。

夫が引き起こした罪において、夫に貞節な妻はサティーになることで、その夫の罪を浄化させ、夫が異国などで亡くなったときも、夫の遺品などをもって炎の中に入れば、天界を獲得できると述べ、サティーの行為を称賛しているが、一方で、ブラーフマンの女性の場合は、自殺の行為に当たるため、禁止している。

ṣaṅmāsaṃ vātha varṣaṃ vā adikaṃ ca praśasyate. 1.52.64

pativratā bhavedyācayāvat pūtā vrajed divam,

〔誓いは〕6か月、あるいは1年、それ以上が称賛される。

夫に貞節な女性は、純粋であるかぎり天国へ行く。

surāpaṃ viprahantāraṃ sarvapāpayutaṃ patim. 1.52.65

paṃkāt pūtaṃ nayet svargaṃ bharttāraṃ yānugacchati,

夫に従う者〔妻〕は、酒を飲んだり、ブラーフマナを殺す〔など〕

あらゆる罪を持つ夫を泥〔罪〕から浄化された天界へ導くべきであろう。

kaṃdarpasadraśo bhartā sā ratīvā manoramā. 1.52.66

jīṣṇorevaciraṃlokebhūṃkte'namtamayaṃsukham,

彼はヴィシュヌのように神々しく、彼女はラティのように魅力的である。

太陽のような世界で永遠に、彼女はこの無限の喜びを経験する。

pativratā balādya ca vidūre svāmipātane. 1.52.67

cihnaṃ labdhvā mṛtā vahnau pāpād uddharate patim,

そして、遠くで夫が死んだとき、〔夫の〕徴しを得て、火の中で〔自らの〕力によって死ぬ貞節な女性は、夫を罪から解放する。

pativratā ca yā nārī deśāntaramṛte patau. 1.52.68

19 1) ādī-kāṇḍa 2) bhūmi-kāṇḍa 3) brahma-kāṇḍa 4) pārāla-kāṇḍa 5) śāṣṭri-kāṇḍa 6)uttara-kāṇḍa

20 [Harza 1940:107-127]

21 [Kane 1977:893]

sā bhartuś cihnam ādāya vahnau suptvā divaṃ vrajet,

そして、夫に貞節な女性は夫が他国で死んだときに、
夫の徴しを持って、炎の中で眠れば、天界を獲得するであろう。

yā strī brāhmaṇajātīyā mṛtaṃpatimanuvrajet. 1.52.69

sā svargam ātmaghātena nātmānaṃ ta²² patiṃ nayet,
死んだ夫に〔ついて〕行く者は、ブラーフマナの女性で、
自殺〔の罪〕の故に、自分自身と夫を天界に導かないであろう。

na mriyeta samaṃ gatvā brāhmaṇī brahmaśāsanāt. 1.52.70²³

pravrajyāgatim āpnoti maraṇad ātmāghātīnī,
ブラーフマナの女性は、ブラフマー神の教示に従って、〔一緒に〕夫とともに行って
死ぬべきではない。自殺する女性は死んだ後、放浪して破滅に至る。

hareś ced vāsaraṃ prāpya vidhavā na vratam caret. 1.52.79

punar vaidhavyatām eti janmajanmani durbhagā,
そして、もしヴィシヌの日²⁴に至ったら、未亡人は誓戒をなすべきではない。
〔もし、それを破ったら〕再び、不幸な女性は繰り返しの誕生において未亡人となる。

bhojanāt matsyamāmsasya vratānām viprayogataḥ. 1.52.80

ciraṃ nirayam āsādyā śunī bhavati niścitam,
魚、肉を食べることで、誓戒を正しく守らないが故に、
長い間、地獄に赴き、〔そして〕疑いなく雌犬になる。

duṣṭā yā maithunaṃ gacched vidhavā kulanāśinī. 1.52.81

narakānanubhūyātha ḡdhriṇī daśajanmasu,
dvijanma pheravābhūtvā tato mānuṣatām vrajet. 1.52.82
〔他の男と〕結ばれた、不道德な未亡人は家系の破壊者である。

地獄を経験して、疑いなく〔彼女は〕10回の出生においてハゲワシ〔になり〕、2回ジャック
カル〔として〕生まれ、それから人間の状態を獲得するだろう。

22 本文では ta であるが na で考えた。

23 試訳 1.52.71-1.52.78 は内容が異なるため抜粋している。

24 木曜日のことを指すと考える。

2-2. 『ヴィシュヌプラーナ』

この文献は、ヴィシュヌ系のパンチャラートラ派の文献で、すべての内容がヴィシュヌ系の記述である²⁵。また、プラーナ聖典の特徴でもあるパンチャラクシャナも具えている。現存するテキストは6の編²⁶から構成され、126章6000詩節ある²⁷。

『ヴィシュヌプラーナ』において、夫の死の際に、妻がサティーになることについての言及がいくつか見られる。その1つは、シャタダヌ王とシャイヴィヤ王女の逸話である。この逸話は、女性の美德を説くことを強調しているわけではなく、男性の振る舞いにおいて異端者との会話や接触を避けなければならないことを教示する内容で、その逸話において王が死んだ際には、妻が夫の積みまきに昇る言及がされている。

śrūyate ca purā khyāto rājā śatadhanurbhuvī
patnī ca śaivyā tasyābhūdātī dharmaparāyaṇa 3.18.51

昔、シャタダヌという名前の王がいた。
そして、彼にはシャイヴィヤ [という] 敬虔な妻がいた。

pativratā mahābhāgā satyaśaucadayānvitā
sarvalakṣaṇasampannā vinayena nayena ca 3.18.52

[彼女は] 夫に対して貞節で、非常に高潔、誠実、純粹で、
また、あらゆる吉祥さを兼ね備えている。

sa tu rājā tayā sārddham devadevaṃ janārdanam
ārādhayāmāsa vibhuṃ paramēṇa samādhinā 3.18.53

そして、かの王は、豊富な神々の中で最高であるジャーナルダナ神を
この上ない献身によって、崇拝していた。

homairjapaistathā dānairūpavāsaiśva bhaktitaṃ 3.18.54
pūjābhiśvānūdivasaṃ tanmanā nānyāmānasaḥ 3.18.55

[それは] 護摩行、読経、供物、断食のような帰依を行うことで、
心を [それに] 属することに集中し、崇拝していた。

ekadā tu samaṃ snātau tau tu bhāryāpatī jale
bhāgīrathyāssmuttīrṇau kārttikyāṃ samupoṣitau

25 [澤田 2016:14]

26 アンシャ *aṃśa*

27 [Kane 1977:907]

pāṣaṇḍinam apaśyetām āyāntaṃ sammukhaṃ dvija 3.18.56

バラモンよ、ある日、カールッティカ月の満月の日に、その夫婦は齋戒をしてから、バーギーラティー川で、一緒に沐浴をしたあと外に出てくると、異教徒が目の前にやってくるのを見た。

cāpācāryasya tasyāsau sakhā rājño mahātmanaḥ

atastad gauravātena sakhābhāvam atha akarot 3.18.57

この人は、その偉大な王の弓の師範の友人であった。

それゆえ、[王は] その師範と同じように、友人として振舞った。

na tu sā vāgayatā²⁸ devī tasya patnī pativratā

upoṣitāsmīti raviṃ tasmin ḍṛṣṭe dadarsā ca 3.18.58

しかし、かの王に貞節な妻の王女は、慎み深くなく、

「齋戒をしています。」と [言って]、彼を見るや、太陽を見出した。

samāgamyā yathānyāyaṃ dampaṭī tau yathāvidhi

vaiṣṇoḥ puḥjādikaṃ sarva kṛtavantau dvijottam 3.18.59

規定通りに、かの夫婦は [家に] 戻って来て、儀軌に従って、

ヴィシュヌ神の礼拝などを、すべてをなした。優れたバラモンよ。

kalena gacchatā rājā mamārasau sapatnajit

anvāruha taṃ devī cītāsthaṃ bhūpatiṃ patim 3.18.60

やがて、敵を征服した王は、死んだ。

王女はその薪の上の、大地の主である夫に従った。

この逸話は続きとして、夫が現世で異教徒と話をした罪によって死後、犬に生まれ変わった。一方、妻は王女として生まれ変わり、彼女は自分の前世を、自分の夫をわかっていた。そのため、王女はその犬と結婚し、彼に自身が前世では王であったことを気づかせる。それを思い出した犬は自死し、ジャッカルに生まれ変わった。王女はまた、自分の王を探しに行き、ジャッカルになった夫を見つけ出し、王女はまた、そのジャッカルに過去を思い出させた。

その後、彼はオオカミに生まれ変わり、同様に彼の人生を放棄させた。そして、彼はハゲタカとなって生まれ変わり、その次はカラスに生まれ変わった。王はその後、孔雀に生

まれ変わり、最終的には人間に生まれ変わった。彼女は彼と結婚して、彼が戦いで死ぬまで幸せに暮らした。そして、彼が死んだとき、彼女は彼の身体を抱いて積みまきに昇り、二人は天界に行った²⁹。

又、『ヴィシュヌプラーナ』第33章では、クリシュナの葬儀の様子が描写されている。

arjjunoapi tadānviṣya kṛṣṇarāmakalevare

saṃskāraṃ lambhayāmāsa tathānyeṣāṃ anukramāt 5.38.1

アルジュナもまた、クリシュナとラーマの遺体を見つけて、
そして、葬儀を執り行った。同様に他の者も執り行った。

aṣṭau mahiṣyaḥ kathitā rukmiṇīpramukhāstu yah,

upaguhyā harerdehaṃ viviśustā hutāśanam. 5.38.2

八人の素晴らしい女王たちの、最も主要であるルクミニーは
ハリの身体を抱擁して炎の中に入った。

revatī caiva rāmasya dehamāśliṣya sattam

viveśa jvalitaṃ vahniṃ tatsaṅgāhrādaśīṭalam 5.38.3

レーヴァティーもまた、[バラ] ラーマの遺体にしっかりとくっついて、
燃える炎の中に入っていった。それは、あたかも冷たい [ところに] 入るように。

ugrasenastu taccha tvā tathaivānakadungubhih

devaki rohiṇī caiva vivisurjatavedasam 5.38.4

そして、同様にウグラセーナとアナカドゥングビ、デーヴァキー、ローヒニーも
[炎の中へ] 入って行った。

2-3. 『バーガヴァタプラーナ』

この文献は、12巻約18000の詩節から成り、ヴィシュヌ派の一派バーガヴァタ派の聖典とされている。成立年代は、5世紀から10世紀前の範囲で研究者によって意見が異なり議論されているが³⁰、概ね10世紀ごろの成立として考えられている³¹。この著者は南インドのタミルナドゥ出身であり、『ヴィシュヌプラーナ』を典拠としている³²。

29 [Wilson 1980a:494-500]

30 [Kane 1977:903]

31 [橋本・宮本・山下:2005]

32 [南アジア 1992:598]

ナーラダ仙が、ユディシュティラ大王に教訓を伝えている場面での一節である。

dahyamāne 'gnibhir dehe patyuh patnī sahoṭaje,
 bahiḥ sthitā patiṃ sādhvī tam agnim anuvekṣyati. 1.13.58
 夫の肉体が小屋とともに炎によって焼かれているとき、
 外にいる夫に貞節な妻は、正にその炎に入るだろう。

この詩は、妻がサティーになることについての言及ではないが、教訓を伝える中で、貞節な妻がサティーをすることを述べ、サティーの行為はなされるべきものであることを示している。

2-4. 『ガルダプラーナ』

現存する文献は、600年代以降950年までであると考えられている³³。この文献には、創造論や儀式の祈り、占星術、手相占い、宝石にも関する内容等が含まれている。

pativratā yadā nārī bhartuḥ priyahite ratā,
 icchet sahaiva gamanaṃ tadā snānaṃ samācaret. 10.35
 もし妻が夫に貞節であれば、夫の好ましいことに専念し、
 [夫が死んだ] その時一緒にいくことを望めば、[妻は] 沐浴をすべきである。

kuṅkamāñjanasadvastrahūṣaṇair bhūṣitāṃ tanum,
 dānaṃ dadyād dvijātibhyo bandhuvargebhya eva ca. 10.36
 サフラン [の粉末]、黒色の染料³⁴、美しい衣装、装飾品などで身体を飾れ。
 [そして] 二度生まれの者 [バラモン] と、親族のために実に贈り物を与えよ。

guruṃ namaskṛtya tadā nirgacchen mandirād bahiḥ,
 tato devālayaṃ gatvā bhaktayā taṃ praṇamed dharim. 10.37
 師にお辞儀をしてから家から外へ出て行くべきである。
 そして、寺院に行つて献身によってかのハリ [ヴィシュヌ神] に敬礼すべきである。

samarpyābharaṇaṃ tatra śrīphalaṃ pariḡṛhya ca,
 lajjāṃ moḥaṃ parityajya smaśānabhavanaṃ vrajet. 10.38

33 [Kane 1977:889]

34 女性の目の化粧。目の外側を隅どりする。

そこで身に着けているものを捧げて、そしてココナッツをもって
恥じらいと迷妄を捨て火葬場に行くべきである。

tatra sūryaṃ namaskṛtya parikramya citāṃ tadā,
puṣpaśayyāṃ tadārohen nijānke svāpayet patim. 10.39

そこで太陽にお辞儀をして、その時積み薪を右繞し
花で飾られた寝台に上がり自分の膝の上に夫を寝かせるべきである。

sakhibhyaḥ śrīphalaṃ dadyād dāham ājñāpayet tataḥ,
gaṅgāsnānasamañ jñātvā śarīraṃ paridāhayet. 10.40

女友達にココナッツを与え、そして〔自分を〕燃やすよう命ずるべきである。
ガンジス河で沐浴をする〔ときと同じである〕と考えて、身体を燃やすべきである。

na dahed garbhaṇī nārī śarīraṃ patinā saha,
janayitvā prasūtiṃ ca bālaṃ poṣya satī bhavet. 10.41

妊娠している女性は夫と一緒に身体を焼くべきではない。
〔そのあと〕子供を生んで、そして養ってからサティーとなる〔ことができる〕。

nārī bhartāraṃ āsādyā śarīraṃ dahate yadi,
agnir dahatī gātrāṇi naivātmānaṃ prapīḍayet. 10.42

夫に〔死んで〕ついていく女性は身体を焼くとき
火は手足を焼くが、実に魂は苦しめない。

dahyate³⁵ dharmāyānānām dhātūnām ca yathā malāḥ,
tathā nārī dahet pāpaṃ hutāṣe hy amṛtopame. 10.43

そして、金属が溶けるときに不純物が焼かれるように
そのように女性は罪を実に最も優れた甘露のような火で燃やすべきである。

divyādau satyayuktaś ca śuddho dharmayuto naraḥ,
yathā na dahyate taptalohapiṇḍena karhicit. 10.44

紙の裁き〔神盟裁判〕において、真実を持ち純粋で高德な男性は
赤熱とした鉄球で〔さえ〕いつでも焼かれないように

35 malāḥ が (PI) なので dahyante (PI) と考えた。

tathā sā patisaṃyuktā dahyate na kadācana,
antātmātmanā bhartur mṛtenaikatvam āgatā. 10.45

同様に夫と結婚した女性はどんなときも焼かれることはない。
死ぬことによって、夫の内奥の魂とあなたは一緒になる。

yāvaca cāgnau mṛte patyau strī nātmānaṃ pradāhayet,
tāvan na mucyate sā hi strī śārīrāt kathañcana. 10.46

夫が死んだ時、〔その〕火によって女性が自分自身も焼かない限り
その限り、実にかの女性は決して身体から解き放たれることはない。

tasmāt sarvaprayatnena svapatiṃ sevayet sadā,
karmaṇā manasā vācā mṛte jīvati tadgatā. 10.47

そのため、あらん限りの努力で自分の夫にいつも献身すべきである。
行為、心、言葉によって、彼が死んでいようが生きていようが、

mṛte bhartari yā nārī samārohedd hutāśanaṃ,
sārunḍhatī samā bhūtvā svargaloke mahīyate. 10.48

夫が死んだ際、炎〔の中に〕入る女性は
天界でアルンダティーとともに行く人で賞賛される。

tatra sā bhartṛparamā stūyamānāpsarogaṇaiḥ,
ramate patinā sārḍhaṃ yāvada indrāścaturdaśa. 10.49

そこで彼女は最高の夫を得た女性として、アプサラスたちに賞賛されながら
夫とともに 14 人のインドラ神が〔支配する期間〕楽しむ。

mātrkaṃ paitṛkaṃ caiva yatra sā pradīyate,
kulatrayaṃ punāt yatra bhartāraṃ yānugacchati. 10.50

夫に従う女性は彼女が母親の先祖と父親の先祖、
夫の先祖と敬意が払われるところの 3 家系を浄化する。

tisraḥ koṭyo'rdhakoṭī ca yāni romāṇi mānuṣe,
tāvata kālāṃ vaset svarge patinā saha modate. 10.51

人間の体毛〔がある限り、つまり〕3500 万年
それ程の間、夫と一緒に天界に住み、喜ぶ。

vimāne sūryasānkāṣe krīḍate ramaṇena sā,

yāvad ādityacandrau ca bhartṛloke ciraṃ vaset. 10.52

太陽神〔が持っている乗り物に〕似た乗り物〔に乗って〕彼女は喜んで遊ぶ。

太陽と月が〔存在〕する限り、夫の世界で長い間住む。

『ガルダプラーナ』では、サティイーに対して肯定的な内容が見られた。夫が亡くなったとき、妻がサティイーになるまでの手順等を説明する。ほかに、妊娠している女性はサティイーになることが禁じられており、子供を出産した後にサティイーになることができることなどが述べられ、さらには、夫の遺体と焼かれる妻の身体の状況などが描写されている。そして、妻がサティイーになることで夫の罪が浄化されるという記述がかかっている。10.47章から52章は『ヤージュニャヴァルキヤ法典』(Yājñavalkya-smṛti)の注釈書『ミタークシャーラー』(Mitākṣarā)³⁶と同様の内容であると確認された。

ヴェーダ聖典における『ヤージュニャヴァルキヤ法典』は、ヴェーダ期の有名な学匠ヤージュニャヴァルキヤの述作と仮託し、主に生活規範や法規定が記されている。この法典は、圧縮された教説、比較的簡潔な分量で法典の必要項目が書かれていることから、いくらかの学者たちによって注釈書が書かれた。その一つである『ミタークシャーラー』では、サティイーの行為が称賛される。その行為によって、妻は天界へ行き夫と過ごすことができ、たとえ夫が犯した罪でもサティイーをすることでその罪は浄化され、その効力は一定の先祖の家系が浄化できると解釈されている。

この『ミタークシャーラー』が依拠する文献は年代不詳が多く、サティイー称賛の言及を折衷的に引用している傾向が見られる。その内容は、サティイー対象者に関する(サティイーの行為はカーストによって区別される)言及や、理想とする女性の振る舞いについて、他にも、良き女性としてのサティイー(理想女性)、サティイー(寡婦殉死)の儀礼方法、断食方法など具体的な内容が示されている³⁷。

本稿では18のマハープラーナ文献のうち4文献におけるサティイーの記述について確認した。まず、『パドマプラーナ』(10世紀以前)は、サティイーに関する記述が確認され、夫が引き起こした罪は、妻がサティイーになることでその夫の罪を浄化させることができるということ、夫がいない場合のサティイーの方法等の言及が見られた。プラーフマンの女性の場合は、自殺の行為に当たるため禁止され、これらは上記の法典の注釈書とも類似する

36 [相川2015]ではこれらの文献におけるサティイー観を考察している。

37 筆者は、一つのヴェーダ聖典とその注釈書に着目することから、時代の変遷とともにサティイーに関する観念は、抽象的な理想の女性像(サティイー)は具現化し、サティイー(寡婦殉死)の儀式が形式化していったと結論づけた。[相川2015]

内容であった。

また、『ガルダプラーナ』(600-950年代)においても、『ミタークシャーラー』の一部が同様の内容であることが確認できた。『ミタークシャーラー』の書かれた年代はAD11-12世紀であることから、プラーナ文献の内容が、法典の注釈書に影響を与えている可能性がある。また、これらはプラーナ聖典の特徴でもある物語形式での描写ではなく、戒律的な要素が強く見られた。それは、『バーガヴァタプラーナ』も同様で、妻がサティーになることについての言及ではないが、教訓を伝える中で、貞節な妻がサティーをすることを述べられ、サティーの行為はなされるべきものであることが示されている。

一方、『ヴィシュヌプラーナ』では、サティーの観念を直接述べる記述は確認できなかったが、プラーナ聖典の特徴である物語形式でサティーの描写が確認できた。

最後に、これらのプラーナ聖典の書かれた時代とその背景、さらに文献自体の宗教性志向などを確認した上で考察するとより深い考察が可能であると考えますが、その点については今後の課題としたい。

参考文献

『ヴィシュヌ・プラーナ』(*Viṣṇu-purāṇa*)

Mythology and Tradition, Book2, Nag Publishers 1980.

[Wilson1980a] H.H.Wilson, *Srīmanmaharṣivedavyāsapraṇītam viṣṇupurāṇa A System of Hindu Mythology and Tradition*, Book1, Nag Publishers 1980.

[Wilson1980b] H.H.Wilson, *Srīmanmaharṣivedavyāsapraṇītam viṣṇupurāṇa A System of Hindu*

『パドマ・プラーナ』(*Padma-mahāpurāṇam*)

The Padmamahāpurāṇam. Delhi Nag Publiseres, 1984.

[Bhatt1988] G.P Bhatt, *The Padmamahāpurāṇa. Part1 Translated and Annotated by Ganesh Vasudeo Tagare. Ancient Indian Tradition & Mythology Series Purāṇas Vol.39*. Motilal Banarasidass, 1988.

『バーガヴァタ・プラーナ』(*Bhāgavata-mahāpurāṇa*)

Nag Sharan Singh The Bhāgavatamahāpurāṇam. Delhi Nag Publishers,1987.

[Shastri1976] J.L.Shastri. *The Bhāgavatamahāpurāṇa Part1 Translated and Annotated by Ganesh Vasudeo Tagare. Ancient Indian Tradition & Mythology Series Purāṇas Vol.7*. Motilal Banarasidass, 1976.

『ガルダ・プラーナ』(*Garuḍa-purāṇa*)

[Wood 1911] Ernest, Wood. S.V.Subrahmanyam. An Introduction from Sris Chandra Vasu.

THE garuḍa purāṇa (with English translation), sudhīndra nātha vasu,1911.

[Altekar 2005] Alrekar, A.S. The Position of Women in Hindu Civilization. From Prehistoric Times to the Present Day. Motilal Banarasidass Publishers, SecondEdition1959, Reprint1962, 1973, 1978, 1983, 1991, 1995,1999,2005.

[Brill2011] *Handbook of Oriental Studies Handbuch Der Orientalistik Section Two India*, edited J.Bronkhorst, A. Maliner, Brill's Encyclopedia of Hinduism, Vol III Society Religious Specialists, Religious Traditions, Philosophy, edited by Knut A. Nacobsen, Brill 2011.

- [Doniger 1990] Wendy Doniger, *Textual Sources for the Study of Hinduism*, The University of Chicago Press, 1990.
- [Harza1940] Hazra, R C., *Studies in The Purāṇic Records on Hindu Rites and Customs*, Delhi, Patna, Varanasi: Motilal banarsidass, 1940.
- [Kane 1967] Kane, Pandurang Vaman. *History of Dharmasastra Ancient and Mediaeval Religious Civil law in India*. Poona : Bhandarkar Oriental Resaerch Institute, 1977.
- [Matchett 2003] Freda Matchett, “The Puranas”, *THE BLACKWELL COMPANION TO HINDUISM*. Gavin Flood, Malden, Oxford, Carlton: Blackwell Publishing, 2003.
- [Narasimhan 1990] Narasimhan, Sakuntala. *Sati: Widow Burning in India*. Newyork: Doubleday, 1990.
- [相川 2009] 相川愛美、『サティー観の歴史の変遷に関する研究』、東洋大学大学院、修士論文 2009年。
- [相川 2015] 相川愛美、「ヒンドゥー教文献におけるサティー観の変遷 —ヤージュニャヴァルキヤ法典とその注釈書を中心として—」、『東洋大学大学院紀要』、第52集、東洋大学大学院、2015年、237-251頁。
- [澤田 2016] 澤田容子『アルダナーリーシュヴァラ研究—プラーナ聖典における創造神話の構造分析—』東洋大学大学院 博士論文、2016年。
- [橋本・宮本・山下 2005] 橋本泰元・宮本久義・山下博司、『ヒンドゥー教の事典』、東京出版堂、2005年。
- [ヒンディー語 = 日本語辞典 2006] 古賀勝郎・高橋明〔編〕、『ヒンディー語 = 日本語辞典』大修館書店、2006年。
- [南アジア 1992] 辛島昇 監修『南アジアを知る事典』、平凡社、1992年。
- [ルヌー 1996] ルイ・ルヌー 渡辺重朗・我妻和男 訳、『インドの文学』、白水社、1996年。

キーワード：サティー（寡婦殉死）、ヒンドゥー教、プラーナ聖典、インド